

英語語法文法学会 第18回大会資料

日 時： 2010年10月16日（土）

開催地： 日本大学（文理学部キャンパス）

住 所： 〒156-8550
東京都世田谷区桜上水 3-25-40
[http:// www.chs.nihon-u.ac.jp](http://www.chs.nihon-u.ac.jp)

- JR「新宿」駅から乗り換え、
京王線「下高井戸」駅、あるいは「桜上水」駅下車
徒歩8分（「新宿」駅からの乗車時間は約10分）。

英語語法文法学会
The Society of English Grammar & Usage

September 2010

第 18 回大会プログラム

(年会費 4,000 円 大会参加費: 学会会員 500 円 / 当日会員 2,000 円 (予稿集代を含む))

日 時 : 2010 年 10 月 16 日 (土)

< 昼食は、学内食堂も営業していますが、駅周辺での購入をお勧めします。 >

開催地 : 日本大学 (文理学部キャンパス)

住所 : 〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40 (Tel. 03-5317-9709)

[http:// www.chs.nihon-u.ac.jp](http://www.chs.nihon-u.ac.jp)

(京王線「新宿」駅から「下高井戸」駅、

あるいは「桜上水」駅下車、徒歩 8 分)

開催校委員 : 吉良文孝・一條祐哉

ワークショップ (3 号館 3508 講義室) ● 研究発表 (3 号館 3505・3507 講義室)
総会 (3 号館 3507 講義室) ● シンポジウム (3 号館 3507 講義室) ● 会員休憩室
(3 号館 3506 講義室) ● 司会者控え室 (3 号館 3510 講義室) ● 関係者 (ワーク
ショップ・研究発表・シンポジウム発表者) 控え室 (3 号館 3509 講義室) ● 書籍
展示 (3 号館 5 階ホール) ● 運営委員会室・大会本部 (3 号館 3501 講義室)

受付 : 10 時 30 分より 3 号館 5 階ホール

ワークショップ (3 号館 5 階 3508 講義室) 10.45 - 11.40

司会 中澤和夫 (青山学院大学)

1. 「具体的金額を表す名詞の副詞的性質について」
年岡智見 (日本学術振興会特別研究員)
2. 「補文を取る I don't think 型の 2 つの用法について」
明日誠一 (青山学院大学非常勤)
3. 「両面性表現」
金子輝美 (愛知淑徳大学非常勤)

受付 : 12 時 30 分より 3 号館 5 階ホール

研究発表 13.00 - 14.45

第 1 室 (3 号館 5 階 3505 講義室)

司会 吉田幸治 (近畿大学)

1. 13.00 - 13.35 「To と for の指向性 - to NP、for NP と事態実現の観点から」
岩田真紀 (京都大学大学院)
2. 13.35 - 14.10 「受動態をとるイディオムに見られる前置詞の特質について」
渡邊丈文 (青山学院大学大学院)
3. 14.10 - 14.45 「二重目的語構文と動詞 pour の親和性をめぐって」
宮下垂矢子 (京都精華大学)

第2室 (3号館5階 3505講義室)

- 司会 田中一彦 (大阪市立大学)
1. 13.00-13.35 「被動作主項を顕現させない動詞に関する考察—レシピの英語を題材に」
新池邦子 (京都府立大学大学院)
2. 13.35-14.10 「英語の名詞における文脈依存の非状态的意味」
清水康樹 (東北大学大学院)
3. 14.10-14.45 「属格代名詞を含む have 構文について」
武内梓朗 (筑波大学大学院)

総会 (3号館5階 3505講義室) 15.00 - 15.20

開会の辞	会 長	安井 泉	(筑波大学)
開催校代表挨拶		加藤直人	(日本大学文理学部長)
学会賞・奨励賞選考報告	会 長	安井 泉	(筑波大学)
事務局報告	事務局長	吉良文孝	(日本大学)

シンポジウム (3号館5階 3505講義室) 15.35 - 17.45

テーマ 「英語の冠詞、限定詞をめぐる一言語事実を如何に説明するか？
語法文法研究、言語事実、文法理論、英語教育の interface」

- 司会 菅山謙正 (京都府立大学)
1. 「英語の冠詞・限定詞：序論」 菅山謙正 (京都府立大学)
2. 「英語教育の中の冠詞」 石田秀雄 (京都女子大学短期大学部)
3. 「認知文法における「冠詞」と kind of N に出現する不定冠詞」
高木宏幸 (近畿大学)
4. 「HPSG から見た限定詞」 前川貴史 (北星学園大学短期大学部)
- ディスカッサント 田村幸誠 (滋賀大学)
五十嵐海理 (龍谷大学)

※先に会員宛送付いたしました「大会資料」(3 ページ)には、ディスカッサントとして田村幸誠氏と高木宏幸氏のお二人の名前が誤記載されておりました。正しくは、田村幸誠氏と五十嵐海理氏です。お詫びして訂正いたします。

閉会の辞 吉良文孝 (日本大学)

懇親会 18.00 - 19.30 会場：「秋桜 (コスモス)」(3号館1階)
(懇親会費：一般 4,000 円 学生 2,000 円)

連絡先：英語語法文法学会事務局

(〒156-8550
東京都世田谷区桜上水 3-25-40 日本大学文理学部英文学科 吉良研究室内)
Tel. 03-5317-9709 Fax 03-5317-9336 email: kira@chs.nihon-u.ac.jp

ワークショップ（3号館5階 3508講義室） 10.45 – 11.40

司会 中澤和夫（青山学院大学）

具体的金額を表す名詞の副詞的性質について

年岡 智見（日本学術振興会特別研究員）

本発表では、支払い・請求の事態を表す言語表現における「具体的金額を表す名詞」の副詞的性質に関して論じる。例文(1)の\$100は一般に動詞 *pay*, *charge* の(直接)目的語とみなされるが、純粋な目的語とは言い難い副詞的性質を併せ持つ。

(1) They will {pay / charge} (you) \$100 for the service.

その証拠として(i)疑問代名詞 *what* のみならず疑問副詞 *how much* を用いた疑問文が可能であること、(ii)(2b)のように与格交替に制限があること、(iii)受身の主語になりにくいこと等が挙げられる。また、動詞 *tip* や *fine* が SVO(=人)及び SVO1(=人)O2(=金)のパターンは取っても、SVO(=金)はめったに取らないことも O2 が付加的な要素であることを物語っている。

(2) a. The school will charge {the parents a small fee / a small fee to the parents}.

b. The school will charge {the parents \$500 / * \$500 to the parents}.

商業取引における金銭の意味を考えると(i)硬貨・紙幣などの物理的物体としての側面と(ii)経済的な価値スケール上の数値としての側面があるが、このうち後者の側面が金銭の副詞的性質を支えていると考えられる。

補文を取る I don't think 型の2つの用法について

明日誠一（青山学院大学非常勤）

補文を取る I don't think 型の形式には一般に2つの用法があると考えられ、実際、not の作用域、付加疑問文の形式、I think のモダリティ性の3つの点で相違が認められる。特に、否定に着目すると、I don't think の部分が、形式と意味が一致し、主節が否定に解釈される“I don't think”を表わす場合と、形式と意味にねじれを起こし、not が実質的に補文の命題を否定し、主節自体は肯定に解釈される“I think”を表わす場合とに分けられる。

本発表の論点は大きく2つあり、1つは、補文の命題を否定する解釈が語用論の問題であると考え、補文を取る I don't think 型の用法は、結局のところ、1つにまとめることができる可能性があることである。

もう1つは、(1)が容認される事実についての分析と関係する。否定の文脈に現れる until が not と同一節内に存在する必要があることから考えて、until 8:00 は、意味解釈の過程で主節へ繰り上げが行われるという仮説を提示する。

(1) I don't think Bill will arrive until 8:00, do you?

両面性表現

金子輝美(愛知淑徳大学非常勤)

- (1) I have seen too often that you do not own a country house; a country house owns you. (George Mikes, *How to be Poor*)
- (2) I struck up through the narrow streets that I could not remember and that remembered me not. (Laurie Lee, *A Rose for Winter*)
- (3) It seemed to her then that she had finished with this room, or perhaps that the room had finished with her. (Anita Brookner, *Hotel du Lac*)

「ヒト」主語を X、「モノ」目的語を Y とすると、同じ動詞句を挟んで X と Y が入れ替わって、"X+V+Y" と "Y+V+X" という 2 つの節が対比的に使われている。*The country house owns you. のような単節の独立文は通常は認められにくいですが、(1) のように複節構造形式で用いられると、特有の表現効果が発揮されるのはなぜだろうか。先行研究では He is lacking in common sense. ↔ Common sense is lacking in him./ Good fish abound in the North Sea. ↔ The North Sea abounds in (with) good fish. のような単節構造文が議論の対象にされることが多かったが、本発表では主に複節構造文を対象にする。話者の認知メカニズムの視点から、文脈を伴う 10 数個の実例に基づいてこの言語事象を説明し、英語表現の特徴の一断面を管見する。

研究発表 13.00 – 14.45

第 1 室 (3 号館 5 階 3505 講義室)

司会 吉田幸治 (近畿大学)

To と for の指向性—to NP、for NP と事態実現の観点から

岩田真紀 (京都大学大学院)

NP を従える前置詞として、(1)、(2)のように to、for どちらもとる形容詞がある。従来から、to の意味は物理的空間関係で説明されるが、for の意味をどう捉えるか、物理的空間関係を認めるか否かは研究者間で一致しない。本発表では指向性という統一的観点から、to と for の意味を考察する。

(1) a. Moisture is **essential** to the hair. (BNC)

b. This substance has never been shown to be **essential** for body function.

(BNC)

(2) a. Your father was always **good** to me, and his uncle. (BNC)

b. This would not be **good** for you or your client. (BNC)

まず、コーパスのデータより形容詞に後続する to/for NP を観察し、to/ for NP の実現が一様ではないことを確認したのち、その選択の動機について考察する。また、SVO に後続する to/for NP の選択を観察することにより、主語 NP による事態実現の範疇および to 、for に後続する NP と事態との関係を考察する。これらより、to NP と for NP は事態に対する位置づけが異なることを指摘し、それを動機づけると考えられる to、for のもつ指向性について考察する。

受動態をとるイディオムに見られる前置詞の特質について

渡邊 丈文 (青山学院大学大学院)

本発表で主眼とする論点は以下の二点である。1) look at, go in などの「自動詞 +前置詞」の結合から成るイディオム表現において、受動態が可能となる場合に、当のイディオムはどのような特質をもった前置詞をとりうるのか、について前置詞を二つのグループに分けることによって明らかにする。2) 実際にある特定の動詞 (たとえば look) がイディオム表現となる場合にとる前置詞が複数ある場合には、どのような前置詞ほど受動態になる傾向が高いのかを BNC コーパスを活用して実証的なデータを基に提示する。その際、受動態へのなりやすさを示す「受動性」とそれに並行的に対置される「他動性」という概念及び、イディオムを構成する度合いを示す「イディオム性」なる概念が、受動態という現象を背後にどのような結びついているのか、を前置詞に見られる段階性という観点から意味論的に考察する。典型的自動詞である look, go, come による議論が中心になるが、そこでの結論の実証性を高めるべく他に 15 例の自動詞の用例についても検討したが、前三者と同様の結論を得ている。

二重目的語構文と動詞 pour の親和性をめぐって

宮下亜矢子(京都精華大学)

for 型二重目的語構文 (DOC) には、典型的にはモノの創造・獲得を意味する動詞が生起するが、本来的に液体の移動を表わす動詞 pour は for 型 DOC に生起する際、間接目的語 (IDO) として再帰代名詞を伴うことが多い。

(1) I got some ice out of the refrigerator and poured myself an Old Crow.

(2) The old officer goes to the stove, pours himself a cup of tea, ...

(Hard-boiled Wonderland and the End of the World)

DOC は IDO 項に通常の代名詞を伴うものがプロトタイプとされ、BNC コーパスで DOC を調べると、ほとんどの動詞は再帰代名詞よりも通常の代名詞の頻度が高いが、pour は再帰代名詞の頻度のほうが高い。主語項と IDO 項が同一指示的であることが文脈から明らかである場合も、再帰代名詞を伴って DOC として生起するという点で、DOC との親和性が高い動詞だといえる。

本発表では、このような pour の振る舞いの特殊性と被動作主項の名詞句にかかる制約を紹介し、pour の本来的用法 (CONTENT-LOCATIVE) から DOC 用法への拡張の動機付けを、動詞の意味的特性の観点から説明する。pour の語彙的意味のプロトタイプは空間領域における物理的な液体の移動であるが、空間領域から所有領域へのメタファー的拡張が起こっており、その所有領域における液体の移動を表すために DOC を利用していると主張する。

司会 田中一彦 (大阪市立大学)

被動作主項を顕現させない動詞に関する考察—レシピの英語を題材に

新池邦子 (京都府立大学大学院)

英語のレシピに生起する被動作主項は、名詞句 (Noun Phrases)、代名詞 (Pronouns)、顕現しない被動作主項 (Zeros) に分類される。最近の英語のレシピにおいては被動作主項の顕現しない場合が頻繁に観察される。本発表では、主に、改訂はされているもののイギリスの伝統ある *cookbook* に掲載されているレシピを資料にして、顕現しない被動作主項と共起する動詞について考察する。

まず、'apples' を材料の一つとするレシピを用いて、被動作主項の指示対象としての 'apples' がどのように記述されているかについて観察し、顕現しない被動作主項の使用域を示す。次に、Levin (1993) では 'Verbs of Preparing' と 'Shake Verbs' に分類されている動詞を取り上げ、前者の場合は、その中に含まれる動詞のうちのレシピに頻出する動詞とその顕現しない被動作主項を含む表現が定型化していることを示す。後者の場合は、特に動詞 'stir' を例に挙げ、その動詞と被動作主項を含む表現にはいくつかのパターンが見られることを明らかにし、その被動作主項の指示対象の分析から、各パターンの相互関係を検証する。

英語の名詞における文脈依存の非状態的意味

清水康樹 (東北大学大学院)

次の文において、時間的に後の出来事を明示する語句や節がないにも関わらず、過去完了形が使われるのはなぜか。

- (1) From the start, the victim had been harassed by male patients of this unit (www.allbusiness.com/legal/legal-services.../5597950-1.html)

本発表では、*victim*, *champion*, *criminal* のような名詞は非状態的アスペクトを含むため、その名詞の状態を成す前の出来事に関わる文脈では、動詞句に過去完了形を取ることがあると指摘する。鈴木・安井(1994: 55)は非状態的名詞として *hypocrite* を挙げ、*John is a hypocrite* のような状態的構文でなく *John is being a hypocrite* のような非状態的構文に生じる場合に非状態的になると言う。ここでは、状態的・非状態的アスペクトは構文だけでなく文脈にも依存すると考え、非状態的アスペクトが文脈によって過去完了時制として表される名詞があると主張する。

属格代名詞を含む have 構文について

武内梓朗(筑波大学大学院)

本発表では、(1)のような、**have** の目的語内に主語と同一指示の属格代名詞が現れている構文を考察する。この構文を分析した先行研究は管見の及ぶ限り存在しない。

(1) His passion has its drawbacks.(BYU-BNC)

ここでは、(1)の性質を明らかにするために、(2)のいわゆる所有構文（目的語内に属格代名詞は無い）と比較する。

(2) This plane has four engines. (*Airplane!*)

(3)に見るように、(1)は(2)のようにできる。それに対して(4)に見るように、(2)は(1)のようにできない。

(3) His passion has drawbacks.

(4) *This plane has its four engines.

この容認度の差を解き明かすために、(1)が持ちかつ(2)（そして(3)も）が持たない含みに着目する。(1)が持つ含みを言語化する。

(5) Other people's passion has its drawbacks.

この含みを手がかりにして、(1)のような **have** 構文の性質とその認可条件を考察する。

シンポジウム（3号館5階 3505講義室） 15.35 – 17.45

テーマ 「英語の冠詞、限定詞をめぐって—言語事実を如何に説明するか？
語法文法研究、言語事実、文法理論、英語教育の interface」

司会 菅山謙正（京都府立大学）

冠詞、限定詞の意味・用法は、歴史をさかのぼれば Frege (1892)、Russell (1905) の sense と reference の問題までさかのぼる古くて難解なテーマである。現代英語の冠詞のやっかいな語法・文法について、記述的な立場と理論的な分析の2つの視座から接近し、冠詞の正体に迫ろうと考えている。語法文法研究の英語教育への貢献という観点から、英語教育の現場で英語の冠詞について言語事実を踏まえながら、教えるべき内容はどうかということも議論したい。

司会のほかに、3人の講師を配し、discourse との関連も含め、冠詞の文法的振る舞い、意味について様々な考え方を紹介し、多角的に解明することを目的にしている。討論者2名にも参加していただき、講師の発表にコメントをしていただくのみならず、聴衆との議論にも活発に参加していただく。

英語の冠詞・限定詞：序論

菅山謙正（京都府立大学）

序論として、英語の冠詞について考える場合、どのような問題を解決しなければならないかを簡単に述べる。続いて、英語の冠詞の head 性について話し、なぜ英語では冠詞が NP の最初の位置に来なければならないかを説明する。

この発表では、まず、(New) Word Grammar の枠組みで head の定義を行い、なぜ英語の NP でいわゆる determiners を head と考えなければならないのかを NWG の立場から説明する。一般に2つの語 A、B の間に何らかの文法的な関係があるとき、そのどちらかが他方に文法的に依存していると考えられる。つまり、A、B のどちらかが head になり他方がそれに依存している dependent になる。英語の this popular thoroughfare を考えた場合、thoroughfare がこの NP の head で、this が thoroughfare の dependent とすると、依存関係から言えば、*popular this thoroughfare も文法的であるという予測を文法はする。しかし、もちろん、この形式は文法的ではない。この連鎖の文法性を正しく予測するためには、文法は this を head としなければならない。

上のよう分析すれば、*popular this thoroughfare という語順が非文法的であることは依存関係の交差を禁止する No-Tangling Principle (Hudson 1998: 20) によって説明できる。さらに、determiners とは何かという問題にも触れる。

英語教育の中の冠詞

石田秀雄（京都女子大学短期大学部）

冠詞は英語的な「もの」の見方を表すだけでなく、効果的なコミュニケーションを図る上で大きな助けとなる文法標識であり、使用頻度も極めて高い。それにもかかわらず、これまでの英語教育では、冠詞の存在は等閑視され続けてきた。本発表では、小・中学校の学習指導要領において、冠詞がどう扱われているかを概観するとともに、教科書の用例や指導書の文法説明が抱えている問題点を指摘し、検討を加えていきたい。

- 文法形態素としての冠詞の脱落
 - (1) a. *Green cap. Green cap. Do you have a green cap?* (英語ノート1)
 - b. *Orange pants. Orange pants. Do you have orange pants?* (英語ノート1)
- 可算・不可算の区別
 - (2) *Therefore, if we have boxed lunches, we'll be able to enjoy lunch more.*
(*One World 2*)
- 定・不定の区別（関係節の先行詞）
 - (3) a. *Carson is the scientist who wrote *Silent Spring*.* (*New Horizon 3*)
 - b. *Carson was a scientist who wrote about the danger of farm chemicals.*
(*New Horizon 3*)

認知文法における「冠詞」と kind of N に出現する不定冠詞

高木宏幸（近畿大学）

認知文法（cf. Langacker 2008）では、定冠詞のもつ機能を指示詞からの文法化として捉えるようとする。また Langacker の最近の論考では、Window of Attention の概念を取り入れ、定冠詞と不定冠詞の概念的特徴づけを図っている（Langacker 2010）。

本発表では、まず以上のような認知文法における冠詞の取り扱いについて概観し、その特徴を考察する。次に、その考え方を応用して、下記 (1) に見られるように kind of N の構造においてまれに出現する不定冠詞をどのように捉えることができるかを議論する。

- (1) a. *What kind of (a) man is he?*
- b. *He is this kind of (a) man.*

このような不定冠詞の意味的な貢献については、従来の研究では統一した見解があるとは言えないが、いくつかの分布上の特徴も指摘されている。

この発表では、不定冠詞の認知文法的な特徴づけと構文論的な視点の両面から、実例を検討しつつ、この種の不定冠詞の存在意義とその意味的な貢献について考えていきたい。

HPSG から見た限定詞

前川貴史（北星学園大学短期大学部）

本発表では、限定詞の形態的・統語的な特徴を概観し、制約にもとづく言語理論である Head-driven Phrase Structure Grammar (以下、HPSG) がそれをどのように分析するかを議論する。今回とくに考察したい現象は、以下のような例に見られる、限定詞と名詞の数の一致と不一致である。

(1) *a dozen books*

(2) *those dozen books*

一般的に、単数形可算名詞は(3)が示すように前に限定詞がないと非文法的になる。(4)は複数形名詞にはこのような制約がないことを表している。

(3) *a/the/that/this/* ϕ book*

(4) *the/those/these/ ϕ books*

(1)と(2)の *dozen* は単数形可算名詞であり、統語的に限定詞を要求する。これらの例で *dozen* が統語的に要求している限定詞は、(1)では *a*、(2)では *those* である。注意したいのは、(1)では *dozen* と限定詞 *a* には数の一致があるが、(2)では *dozen* と限定詞 *those* には数の一致がないという事実である。類例には以下のようなものがある。

(5) *those hundred books*

(6) *these sort of cars*

以上の例に見られる、名詞と限定詞との間の数の一致と不一致について、HPSG がどのように説明するか、またそれが限定詞と名詞の統語的關係を考える上でどのような示唆を与えるかを検討する。

ディスカッサント 田村幸誠（滋賀大学）
五十嵐海理（龍谷大学）